
竜の世界で君が好き！

御紋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の世界で君が好き！

【Nコード】

N1463P

【作者名】

御紋

【あらすじ】

動物王国の派生作品である【竜の世界にとりっぷ！】シリーズの番外編です。別名、御紋が世界観やキャラの性格を理解するための練習作品。

ほんとうに、どうなってるの君たち。

世界観に抵触するためはや萌えとはかけ離れてしまっています。それでもいいから、という方はクリックどうぞ！

竜とりシリーズ 人（竜・蛇）物紹介（前書き）

登場人物が多くなりすぎたようなので、紹介文を用意してみました。

参照までにご覧ください。

竜とりシリーズ 人（竜・蛇）物紹介

登場人物設定

地球世界

岩倉 佳永 （28歳独身・落人）

自然体での一人称は「私」または「わたし」。仕事やや緊張して
る時は自然に「自分」となる。

27歳のとき、町内会のプール清掃中いきなり動物世界へと落下
した。

現在は異世界へ落ちてきた人（「落人」として、竜族のリアディ
に保護されている。

お仕事としてはメイドをする女子力もなく、竜族のお年寄り限定
でデッキブラシ片手に竜形の体を洗う仕事をしている。

元ネタは竜族用エステのはずだったがまるで湯屋の女三助になっ
てしまっているようである。色気は酒に酔うとでてくるらしいが、
普段は完璧に消失している。

好きなモノは美味しいもの（酒含む）と、可愛いもの。

実家は岩倉武道館。（館主は祖父。本人は師範代行まで修めてい
た）

5歳の頃に交通事故で父母を亡くし、祖父母の家である岩倉武道
館へと引き取られる。

以後22年間、スパルタなお師匠さまでもある祖父の指導のもと、
「透明な力（合気道参照）」や棒術（杖術や槍術の基礎といわれて
いる）などを修めている。

おかげで腹直筋が6つに割れた。

稽古によつて足音や気配をある程度操作することを会得した達人。
（どうでもいいこと）

24歳のときに育ててくれた祖母（享年78歳）が死亡。
祖父に対して歪んだ独特の愛情表現を持つ頑固な28歳である。

一言。

「私が歪んでいるのは作者のせいであつて年齢のせいではありません
ん」

岩倉 宗吾 （79歳老人・くそじじい）

佳永の祖父。武道についての師匠でもある。

岩倉武道館の館主。町の人に愛されるクソジジイ。

現在の彼女の数は8人。交互にじじい…岩倉家の家事をしてくれる
優しい女性たちをゲットしている。門下生曰く、男の夢の老後。

見合い結婚だった妻への愛情は深く、実は一目ぼれだったらしい。
（本当にどうでもいい）

好きな花は桔梗。（妻の好きだった花）

現在、佳永の幼馴染であり門下生である童顔親父を夫婦ともども
養子にできないかと思案中。

自由に生きる御老人である。

個人的に御紋のお気に入りなキャラ。問題は本編に出そうにも出
ないことかなw とか言ってたら竜とり！5にて回想シーンで初
登場しました。（自己主張が激しい御老体が増えたのは御紋のせい
ですかね？）

一言。

「うん？ 佳永か？ 不肖の弟子でも可愛い孫じゃよ」

竜族上位種（ほにやら付き）

リアディ・ほにやら。 （竜族竜形種上位種・守銭奴）

竜族の上位種。無駄にイケメン。黒髪黒目。見た目は20代後半。佳永を保護したご主人さま。 独身。

通常なら同意種の「ちいさきもの」を保護するセオリーを無視して、蛇族の「ちいさきもの」たちを保護してるあたりが変人。

竜族の大老であるチエイサさまをはじめ、なかなか持つてるコネは豊富な商人である。

実は家事も万能、農業にも詳しい、万能口ボである。 仕事の多忙さと立場を踏まえた結果ほっとんど最近はしてないけど。

メイムとは主従な関係。 けっこう大事にしている。

主人公とはせふりどまり。 最近の本編での扱いがひどいのでちょっと愚痴りたい竜族ナンバーワン。

一言。

「もつと本編で喋らせろ！」

チエイサ・ほにやら。 （竜族竜形種上位種・竜族大老）

竜族の上位種。竜族の群れの大老を務める御老体。男性体。基本イメージ色は赤。

竜形での鱗の色は銅色。磨くと光ります。乾燥肌。人形では竜とり2に明記したまま。（身長187センチ。必要最低限の筋肉。赤い髪に薄い髪がちら混じっている。ちょっと中年風。眼のあたりはややくぼんでる。イケメソ認定済み）

仕事と趣味をかねて、世界に点在している蛇族の里を巡る趣味がある。

楽しそうなことには躊躇なく手を出す困った御老体。

孫も曾孫もいるそう。

佳永のことは「落人どの」、リアディのことは「リアディどの」で呼ぶ。

一言。

「一度かぎりの出演予定がいつのまにか重要位置に立ってやがっただど？ ほほほ、これもわしの人徳人徳」

ファンリー・ほにやら。（竜族龍形種・お局）

龍形種の代表格。

言葉は丁寧でも基本的には女王様。やりたいようにやります。女性ですが、それなりの地位についてる上位種。

昔はいろいろと恋愛で燃えたらしいですが、今は普通のお婆ちゃんしています。つっても、隠居はしてないけどもね。

龍族龍形種の「ちいさきもの」たちを養育されてるらしい。

佳永への呼び掛けは「あなた」「佳永さん」、リアディを「リ

坊」と呼ぶ人。

ぶつちゃけ、リアディが生まれて初めて見たのはこの人。（母親とかではないよw）

一言。

「だって、わたくしお嬢様ですもの」

蛇族上位種（使用人）

トール（蛇族上位種・部下その一）

蛇族のエリート。文武両道タイプ。

男性体。

姉に邸のメイドやつてるウルティカがいる。

自らに求められてる役割と立場を理解して責任ある仕事をする、女性にもてる典型。でも独身。

佳永からの信頼も厚い。理解力・行動力に優れている。レイヤとは親友。

基本、佳永のことは「カナのアニキ」と呼んでる。

蛇形は茶色のカナヘビ。 けっこう平凡な見た目。

一言。

「彼女が欲しいです（ため息）」

レイヤ （蛇族上位種・部下その二）

蛇族の問題児。能力が先祖がえりで強すぎるため、首の後ろに能力封じの紋が浮かんでいる。

脳筋族だが、咄嗟の場合の生存反応はすばらしい。

理解力は悪いが対人スキルは悪くない。判らなくなると鉛筆をかじる癖がある。

佳永を呼ぶ時は「アニキ」と呼ぶことが多い。

彼女というか嫁あり。（ウルティカさん）

蛇形では緑の鱗もち。 毒蛇である。

一言。

「ん？ 座学の時間が苦手なんっすよねえ。 なんとかかなんないっすかねえ」

ウルティカ （蛇族上位種・メイド）

蛇族のメイド。トールの姉。レイヤの嫁。

当番制といいながら、実は「ちいさきもの」たちの養育にかかるメイドは2〜3人しかいなかったりする。

佳永は「佳永さん」呼び。

口調、物腰ともに美人。

蛇形は毒蛇。 斑の紐。

一言。

「実はわたくし子供がいますの。」

「っていったら信じます?」

…笑顔で嘘をつける人だと思います。

メィム （蛇族上位種・無口）

リアディさまの番頭さん。

頭もいい管理職。 出生に些少の特殊性はあるものの普通にお仕事人ですこの人。

リアディさまとは生まれた時から付き合い。

メィムさんのが年下。

オレンジ色の蛇。 毒なし。

一言。

「 当商会のまたのご利用をお待ちしております」

ちいさきものたち

ロッドリー

（蛇族上位種幼生体・元気者）

リアディさまが養育している小さきものの一人。 男の子。

ただいま、絶賛人の言葉勉強中。

一言。

【カナの姉ちゃん。大好きだ！】

ユピ

（蛇族上位種幼生体・ちょっと仔生意気が売りなの）

リアデイさまが養育している小さきものの一人。女の子。

ただいま、絶賛人の言葉勉強中。

佳永が大好き。お姉さまと呼びたい。

元々はロッドリーと佳永の争奪戦をしていたが、イアンの乱入によりただいまは休戦協力関係にある。

一言。

【カナお姉ちゃんと一緒に遊ぶのは、私！】

イアン

（蛇族上位種幼生体・いいとこどり）

最近「ちいさきもの」として養育されるために引き取られた。小さな男の子。

緑の美しい鱗を持つ。（カナのお気に入り）。

一言。

【「ちいしゃいっていいことだよにえ、えんりよなきゅあまえらりえりゅし」】

それは宣言

（ご主人さま編）

（前書き）

それは宣言 (ご主人さま編)

「それは宣言」

“晴れときどき落人^{おちうと}”

そんな言葉が聞かれるようになったのは、最近だ。

この世界には獣がいる。

幼少期を獣の姿で過ごし、あるとき彼等は気付くのだ。 もう

一つの己の形に。

それが人形^{ひとがた}。他の地域では人型とも書くらしいのだが。

その形になると意外に便利なこと気づいたのはいつの時代なのだろう。とりあえず、それなりに古いはずだ。

なにしろ、獣としての社会が人形の社会形成に影響されているのが現実なのだから。

どちらにしても獣の世界のなかで転化することのできるものは少なく、力ある種族のものは更に少なく、主たる権力を持つものたちは更に少ない。

故に、我々上位種たるものたちは義務を背負う。そうでなくては社会は成り立たない。

カナにそれを云ったところ、「ノブレス・オブレ ジュは異世界でも通用するかそうか…」と頷いていたが。

我々が保護する“ちいさきもの”と呼ばれる幼獣たちは長じれば転化することが出来るものたちばかりだ。

希少な存在であればこそ、我々は保護をするのだ。もちろん、ものいわぬ種族たるものたちだとて形は違うが保護はしている。

ただし、彼等は彼等の社会が成り立っているのであまり関与はしないようにしているのだが。

そして、冒頭の言葉に話は戻る。

“晴れときどき落人” 最近なぜか各国で増えているという

「落人」出現現象をもじった言葉らしい。

我々にとつての異世界から落ちてくるために名付けられた「落人」
人だ。

獣の世界であるこの世界では、彼等は保護されなくてはいけない。何故なら、彼等には爪もなく牙もなく鱗もなく毛皮もない。

柔らかな肌とにこやかな笑顔と、知らざる知恵を修めた頭脳を持つているのだから。

「…カナ、何してんだ？」

「ああ、ご主人さま。リアディ 暇なので、今度のお仕事用に蜜蠟を加

工しています」

現在保護している落人のカナはそう答えた。

この前、大量に購入した蜜蜂の巣を大きな鍋で煮溶かしているところだった。

「…多くないか？」

「竜形になったときのお客様の大きさを考えてください。どれだけ作っても困りはしませんよ」

溶解していく蜜蜂の巣を、カナは竹でつくった杓子で突いた。

「……任せた」

その鍋の横でぐったりとしているツールとレイヤがいた。

極端な温度変化は苦手な蛇族だからな、ましてやこれだけ大きな鍋での作業だ。湧き上がるまでの時間といい大変だったことだろう。

「おや？ 御用は何だったんですか？」

一人何でもないような顔で鍋の縁に立っている彼女は、何の緊張もみせずにこちらに聞いてきた。

「ああ、ちよつと商人たちの集会に行ってくる。何かあれば新しい話が聞けるかと思ってな」

同業者同士の対話は重要だ。

「取寄せてほしいものはあるか？」

「ん」。今は定期で納めてくださってる分で足りてますね。むしろ、人手が足りません。新しい人材をお願いします」

カナは本気の視線でそう言った。

「それは俺もそう思うが。これは量より質の話だろう？ 下手に事故を起こされても困るんだし」

正直な話、試験的なサービスとして始めた仕事だ。

カナが来る前に今いるツールを主に試したことがあったが。

……。彼らが蛇でよかった。

そう思う過去があっただけに、下手な人材を投入する気にはなれんのだ。

商人としてはいい考えじゃないなと思いつつ、それでもいいかと思えるだけの価値ある仕事だという確信がある。

…それも悪くはない。

「実践要員ではなくとも、裏方作業の手伝い要員でもいいんですよ。ワックス作りやブラシづくり、あとタオル洗濯とか業務はあるんですから」

いいかげん、メイドさんたちにも申し訳ないじゃないですか。

まだ指の数ほどの回数しかこなしてないために、その手の作業はカナたちと邸のメイドたちにまかせていたことを思い出した。

確かに、この量じゃ日常業務に影響するな。

……今度、臨時報酬でも考えておくか。

メイドたちが文句を言ってこないの、気にしていなかったのだ。「いいですか、ご主人様。女性を敵にまわしちゃいけません。とくに身近にいる女性は」

こちらの表情でも読んだのか、カナが言ってきた。

「衣食住の全ての管理を行ってくれてるんです。あなたが完全に安楽に身ぎれいに日々を過ごせるのは、彼女たちがあなたに敬意を抱いていてくれるからですよ」

それは幸せなことです。
ぐるぐると鍋のなかで蜜蝋が溶けだしている。 ぐるぐるぐる。

「肝にめいじておくよ」

有難い言葉に頷いて、竜族のリアディは部屋を出た。
ぱたりと閉じた扉の向こうで、カナが叫んでいる。

「ああ、もう！ トール、レイヤ！ その水を飲んで、一度部屋から出なさい。30分休んだら、戻ってくるんですよ」

「はい、アニキイ…」

「み、みず……」

ぐつたりとした声で、トールとレイヤの返事が聞こえて来た。

「元気でなにより」

笑いながら、歩を進める。

ぐるぐるぐるぐる。

世界は廻る。

世界の外から人は落ちてきてこの世界に歓びをもたらすのだろう。
幸せなことだ。

けれども。

「佳永は、誰にも渡さない」

空の上にあるのだろう、異世界の穴に向かって呟く。

今日も天気は晴れ。

この広い世界のどこかで人は落ちてきているのだろうか。

リアディにはもう人を拾う気も保護する気もないけれど。

「御主人さまは幸せです」

竜に対してですら怯えることなく言葉を発する彼女以外に、リア
デイの歓びを与えてくれる人などいるはずはないのだから。

了

…甘い、気がする。

よし、番外ならラブが出そうだ。 滲み出す程度だけどな！（泣）

それは宣言

（ご主人さま編）

（後書き）

時期は「竜とり」1と2の間。

それは敬愛

(トール編) (前書き)

第二弾。

蛇族からトールくん編。

時期は竜とり2と3の間くらいです。

それは敬愛

(トール編)

力ある獣の名をなんと呼んだか。
その答えは、上位種。

俺には姉がいる。
たぶんそれは珍しいことだ。

蛇族のトール。それが俺の名前だ。姉の名前はウルティカ。
俺たちはまだ転化する前だった幼体の頃に、この屋敷に来た。
親の名を俺はもう忘れた。たぶん、それは俺だけじゃない。この
屋敷で育った仲間たちは、きつとみな忘れている。

いや、忘れているというのは正しくはないか、知らないのだ。
蛇族には本来親子の情というものはない。

何故なら、蛇族の親の多くは土の中に卵を産むと放置して去って
行ってしまうからだ。

それはもう種としての基本の在り方で、ごく一部分の親たちが鳥
族や豹族のように抱卵や子育てを行うのがまれであるというくらい
だ。

「まあ、蛇は本来単独で生きるものだからね。というか、適応能力
が高すぎるというのもあるんじゃないかな」

ただの私見だけど。

そう言ったのは、俺の仕事仲間というよりも上司であるカナさんだ。

「じゃあ、俺たちが群れとして小さいのはそのせいですかね？」

いろいろと示唆の富んだ会話を提供してくれる彼女をトールは嫌いじゃない。むしろ好きだ。

けれどそれはいわゆる交合の相手とかそういう意味としてはなく、話相手としてだ。

彼女を相手にするには自分では間に合わないことはよく判っていた。

「蛇族は群れという意味では分散してしまっているでしょう？ 体温調節ができないといいながら、寒暖陸海と多様な適応性だ。

おそらく蛇族におけるはぐれはこの世界においては有数の多さなんじゃないのかな」

まだ教えられてはいないだろうことを、カナのアニキは自分で洞察したらしい。

そう、自分の種族の群れを離れた「はぐれ」は本来そんなには多くはない。

一部の例外を除くなら、多くのはぐれはその群れを追放されたものが多い。

けれど、蛇族に限っているのならそうではない。

あえて新しい環境を求めるように移動する蛇族が、「冒険者の種族」と揶揄されるのはそのせいもある。

別名は「食欲の進化」「帰巢本能の退化」とも言われているのだが。

蛇の群れはいくつにも拡散している。おかげで「西蛇の群れ」とか「海蛇の群れ」とかいろいろと名前をつけなきゃやってられないくらいだ。

はぐれとなった個体が無事に環境に適応したのち群れを形成した結果がこのような状況になったのだ。

実際に、ともにこの屋敷で育った仲間たちの中には成人したあと旅に出た者もいる。

元々そのつもりだったらしく、ご主人様の仕事を手伝い幾許かの経験と小銭を得たあとそいつは旅立った。

手紙の一つもよこせというのだ。馬鹿ものが。

「そうね、手紙がくるといいわね」

……あ。

「……」

「さて、それじゃあ私は仕事日誌まとめてくるわね。あとはお願い」

「はい、カナのアニキ」

手を振って、別室へと移動する彼の人を見送った。

（……失敗した）

苦い思いが、心のなかに澱む。

落人である佳永^{かな}には、手紙を出す相手も返す相手もないのだ。

少なくとも、今は。

（リアディさまは、いつまで……）

友人を想う。

兄弟を想う。

家族を、想う。

偲ぶ縁を欲する想いに、獣人も人もないのだということ。

彼の竜はいつ認めるのだろうか。

トールは彼女を「カナのアニキ」と呼ぶ。
それは、彼女がカッコいいからだ。

トールは彼女を「カナのアニキ」と呼ぶ。

それは、彼女が独りだからだ。

トールは彼女を「カナのアニキ」と呼ぶ。

それは、彼女を愛する独りの竜を知るからだ。

「ご主人さま。俺はいつまでも嘘をつくのは辛いんです

よ」

トールは小さく呟いた。

聞くべき相手の居ない場所で。

独りの竜と、独りの落人。

どちらの在り方をも強く尊敬するが故に、トールは今日も願うだろう。

「どうか早く、その眼を見つめて」

それはトールが捧げる、祈りの言葉。

了

それは敬愛

(トール編) (後書き)

敬愛という題名にふさわしいのかちょっと悩みますな。

「眼をみつめる」には、いろいろと感じるものがありまして敬愛の言葉とさせていただきました。

そのへんは活動報告という名のチラシの裏にて書こうかなと思います。

うん、まあ。

佳永に対しての独占欲が激しいご主人さまに遠慮して「カナのアニキ」呼びしてる空気が読めるトールくんなんだよというお話でした。(…身も蓋もないな、そういうと)

スクロールお疲れ様でした！

それは親愛 (レイヤ編) (前書き)

蛇族における子育て事情です。

うん、こんなんでどうでしょうか？ 皆様。

ことによっては、一部変更するおそれもあるところ承く
ださ
いませ。(ぺこり)

それは親愛 （レイヤ編）

「それは親愛 （レイヤ編）」

たとえばの話だ。

海に住んでる蛇族がいたとする。

その蛇は卵を孕み、子を産もうとする。

だが海中での体温の調節は難しい。 本来は卵で生まれる子

供の蛇たちが卵のまま生まれ落ちた場合、すぐにその低い水温に凍えて死んでしまうだろう。

だから、雌の海蛇は卵を産まない。

「では、海蛇の群れはどのように繁殖するのでしょうかねえ」

答えは簡単。

「卵では産まずに卵から生まれた姿 胎生で生むんつすよ」

知ってました？ カナのアニキ！

「……すいません。レイヤがそれを知ってたということの方が衝撃でした」

真顔でアニキが言っていました。

「あんまりです！ アニキ！」

俺だってこれでも邸で育てられた蛇族のエリートなんですよ！

しっかり教育はされたんですからね！！

「……エリート、ですか」

疑わしげに俺を見たアニキの視線に俺は傷つきました！ とって

もとっても傷ついたんですからね！！ アニキ！

俺が生まれたのは、蛇族の最古にして最大の群れ。
「蛇の群^{かがち}れ」だった。

蛇の群れと竜の群れは、密接な位置関係になる。
蛇の群れの奥地にあるのが竜の群れ。
極地とまで称される場所だ。

俺はじつは竜の群れの生まれではない。
卵から孵った場所は、蛇の群れの縄張り内にあった林の土の中。
長じれば上位種となるだろうと見込まれて俺を拾ったのは、「蛇の群れ」の上位種にお仕えしていた一人の奉公人だった。

俺は「ちいさきもの」と呼ばれるものとして、彼等に庇護され養育を受けた。

まだ意思をうまく伝えることが出来ない幼生体でしかなかった俺にとつて、その養育は苦痛だった。

【レイヤ。 ゆっくりでいいから、ゆっくり言葉を真似てごらんなさい】

「ちいさきもの」を養育する者たちには、人形での会話を理解できるように学習をさせることも仕事の一つだった。

慣れない人形での言葉に苦戦する俺に対して、彼女たちは根気強く頑張ってくれたと思う。

けれど、その時の俺にとっては彼女たちは敵でしかなかった。
「レイヤ」

数日後。

俺はその屋敷を離れた。

【なるほど】

無表情なその人は、俺を見つめてただ頷いた。

「それでは、この子は我々がお預かりいたしましょう。」

我がご

主人さまにもそうお伝えいたします」

「頼みます」

ご主人さまだった上位種は、そう告げて彼に頭を下げた。

抱えられた俺を見送る奉公人たちのなかに、俺を養育してくれていたメイド長はいなかった。

【制御を学びなさい】

転化前の俺は、小さな籠に入れられたままで蛇の群れから竜の群れへと運ばれた。

【君は毒を持つ蛇です。 恐怖に怯えて誰かれ構わずその牙を向けることは決してゆるされることはありません。力は制御する意思を持つものにしか与えられません】

制御されぬ力は、暴力でしかありませんから。

その人の性格を知った今となつては、あの時の彼の言葉はすごいレアだったんだと思う。

だって、こんな長文なかなか話さないんだぜ、メイムさんって。

でも、俺は少したけ安堵していた。

俺よりも強い蛇がいる。 それがわかって。

まどろみのなか、強い毒のある牙で噛んでしまったメイド長が無事だっただろうかとそれが心配だった。

「薬は間にあったか」

「はい。幸い処置が早く、おそらく小さな痕が残るだけで済むだろうと言われました」

新しい群れに入った。

目の前にいる、これから俺の『ご主人さま』になる人は怖ろしい程強い存在に感じられた。

「この子は？」

「例の「ちいさきもの」です。能力値が高すぎて制御できずに問題をおこしました」

「なるほど。…確かにレベルは高いな。では、この傷はそのための怪我か」

その頃の俺の身体には、痣や内出血痕、切り傷などの小さな怪我が無数にあった。

強すぎる俺の共感能力が相手の痛みを再現した結果だったり、能力が暴走したときに暴れた際に自分でつくった怪我だったりした。

「ええ。相手の感情や痛みを感じ取り共感した結果のものだということですよ」

「ここで適応できそうなのか」

「試してみるしかないかと」

俺を連れてきたその人は、種族としての格からして違うその人にそう返事した。

【 頑張りなさい】

そう、告げられた。

俺はその日から、《竜族のリアディ》の庇護の下におかれることになった。

【俺はトール！ 初めましてだな！】

最初に俺に声をかけてきた「ちいさきもの」は、笑顔でそう言った。能力封じにと与えられた紋は俺を少しだけ楽にしたけれど、それでも相手がどんな思いを持って対してきているのかはよく分かった。

【平和ボケか、おまえ】

つい、本音がもれた。

だって、相手は本気で俺に対して恐怖を持っていなかったからだ。

《ご主人さま》は全て隠すことなく俺のしてきたことを奉公人や庇護下の「ちいさきもの」たち全員に告げたのに。

【ははは、お前本気で口ワリいな！】

笑顔で心からそう言ってきたトールに対して頭突きを交わしたのが、俺らの付き合いの始まりだ。

【トール！ レイヤ！ ちょっとこっちへ来なさい！！】

【ぎゃあ、姉ちゃん！】

【げ、ウルティカ！】

最初こそは喧嘩友達ともいえる相手だったが、そのうち本音で付き合える友人になったトールと遊び、その姉であるウルティカに付けられる日々は存外に気持ち良かった。

【あなたがレイヤ？ トールと遊んでくれてありがとう】

穏やかに言ってきたウルティカを見て、姉弟なんだなと思ったの

は当然だったと思う。

その当時、最終兵器という名の毒牙こそ使わなかったものの蹴り叩く引っぱる挫く落とすなどの行為は普通に交わっていた弟の喧嘩友達にそのような発言をするあたりがなんとも云えぬ姉弟ならではの同一性を示していると思った。

俺の共感能力の封じはまだまだにつけられたままだった。

最初はそれを嫌だと感じていた俺だったが、それがあからこそ俺は俺でいることの楽さを知ることが出来た。

相手の感じる感情と感覚が、自分の感覚と自我を押しつぶし、混在する恐怖。

それが和らいだことで、俺は俺である自我を育成することが出来るようになった。

【私も毒を持つてるのよ】

【…ウルティカ？】

三匹そろって、陽のあたる屋上で昼寝をしていた時のことだった。天気はよく、日光は温かい。

体温の調節ができない蛇族の俺たちだから、冷えすぎたときは熱を求めて陽にあたるのは必要な生存のための手段であり大好きな時間の一つでもあった。

【私とトールは一緒に卵から孵化したわ。最初に生まれたのは私】

【……】

【他の兄弟は、 彼等は蛇だった。ものいわぬ種族の、蛇族】

小さなとぐろを巻いて、三匹並んで横になっていた。

仲間たちは少し離れた場所で、やはり昼寝中。

【孵る姿を見ながら、違うのかと思いつつ見つけていたわ】

一人なのか、と。

【……】

俺のなかで、ウルティカが追体健している感情が生まれていく。影響されてしまう。

まだ体皮も乾ききらぬ兄弟を見つめながら、自分だけが異端だと

繰り返し繰り返し諦めさせられる少女の感情に。

【だから、嬉しかった】

生まれてきたのは、小さな茶蛇。おそらくどこにでもいそうな平凡な色の体色。

【弟がいてくれたことが嬉しかった】

涙を持たぬ蛇族の少女は、その歡びさえも追って共感させてくる。

【守らなければと思ったわ。守りながら守られて、生きていこうと思ったわ】

唯一の上位種になりうる弟は少女を「姉ちゃん」と呼び、少女は弟を抱きしめた。

お互いの体皮が乾き、移動を開始した彼等は「二人だけの姉弟」だった。

旅の途中だったご主人さまに保護されるまでの間、彼らだけが全てだった。

【この牙は最後の力。使えば、私は駆逐される。あの子に怯えられてしまうのではないかと今でも怯えているのよ】

愚かでしょう？

ウルティカの問いを、俺は愚かだとは思えなかった。

陽のさす風穏やかな日、俺と少女は仲間になった。

この場所が俺の場所だと認識したのは、その日。

俺の力はまだ暴走しなくなった。

無事に俺たち三人が転化し、結局ご主人さまのもとで奉公をする
ことを選んだ数年後。

人に出会った。

神経がざわざわしていたその日。

人が、落ちてきた。

「 ここは、どこだ？ 」

何か見知らぬ道具を抱えた女性は、高い空から落下した衝撃を本
能的にか木々を通ることと和らげ、とっさに下敷きとなろうとした
俺たちの上へと落下して事なきを得た。

蛇の姿で集まっていた俺たちは、なぜか襲いかかってきた女性に
やられながら、ああこの人も一人なのかとなんとなく感じたのだ。

「ですから、ここがこう動くということはこの位置にいと死角が
少なくなるということですよ」

かきかきかきかき。

カナのアニキは頭がいいけど、俺の頭はそんなによくはない。

「うつつ、難しいっす。アニキ」

砂板に今日も仕事のやり方についてのポイントを説明してくれる
カナのアニキは丁寧に指導してくれる。今日もようやく届いた竜形
種の『ふいぎゅあ（可動式）』とやらを動かしながら、説明を繰り返
返してくれている。

「んー、でも俺たちもだいたい仕事に慣れてきたことですし」

そこまでこだわらなくてもいいんじゃない？

フオローしてくれたツールには本気で有難いと思う。友情を俺は
感じた！

「馬鹿いってんじゃないよ。その慣れてきたときにこそ、事
故は起こりやすいんです。もしも本気でそう思ってるんだったら、
しばらく地獄のサバイバル講習ひらきますよ」

本気です。

「「すいません!!」」

目が本気のアニキは怖かったです。
でも嫌いにはなれない。

彼女は彼女で、真剣に俺たちの事を想ってくれてるんだから。

「今日もアニキはかっこいいよな!」

「だな!」

後ろを振り向いたカナのアニキを見つめながら、ツールと囁く。

「早く、気付いてくださいね」

漏れた言葉は、親愛の言葉。

群れを離れて、新しい群れへと落ちた、異世界の人への。

俺からのエール。

了

蛇族のレイヤくんから。

脳筋族でも、彼は彼の目線からいろんなことに気づいていますよ
ということですね。

今までで一番多い文字数の番外編になりました。不思議w

時期は、2から3の間。

スクロール、お疲れさまでした！

それは親愛 （レイヤ編）（後書き）

元々、レイヤは別の育て方されてるっばいよねえという感触を持っている子でした。なので、いろいろと頭の中をぐるぐるしていたのですが。

蛇世界の筆者さまといろいろとお話するうちに、ああなるほどねと思えてしまったのでこのように書いてみた次第です。

レイヤくん、お疲れさま。

（こっちの番外編集で一番多い文字数達成。おめ！> <ノ）

それは懐古する愛

（ファンリーさま編）

「それは懐古する愛

（ファンリーさま編）」

明け方、目覚める前に見た夢は、少しだけ朝に名残を許すらしい。
それがとても嬉しい夢であったとき、私はその過去を思うことを
自分に許す。

私の大切な友人と、

彼女を思うことを。

綺麗な黒髪を持つ、へたれな蛇族の上位種。

危険

種の【大蛇】に生まれついた哀れな蛇。

それが、エン。 私の初恋の人。

「エンさま、エンさま、遊んでくださいな」

綺麗な衣装を着ることが好きになった。

綺麗な言葉を探すことが好きになった。

綺麗な仕草で、あなたに敬意をあらわすことを夢に見ていた少女
時代。

「 ファンリー、さま」

振り向いた彼の瞳はいつも一人ぼっち。

「……怒られますよ？」

痛みをこらえるように彼は笑う。

知っていたのよ、本当は。

貴方が私を嫌っていたこと。

でも認めてなんて上げられなかった。

ですもの。

だって、私お嬢さま

お嬢さまでいなくちゃいけなかったもの。

私の名前はファンリー。竜族龍形種の一族の一人。

竜族における主流は、長であるバランの一族を見ればわかるように竜形種にある。

私たちのような蛇族の変異種として生まれた龍形種や、竜族の亜種である羽ある蛇形種は所詮は少数派^{マイナー}。種としての確立は出来ていても、社会の中では曖昧なものよ。

龍形種の始まりはたしかに蛇族だけど、龍の子供は龍になるの。

だから、私は龍に生まれた龍の子供。

お嬢さまでなく

ちゃいけないの。ねえ、わかる？

「大丈夫ですわ。私は強いから、貴方よりも強いから」

だから怒られたりはしませんわ。

自慢げに綺麗に笑って見せたの。

新しく作ってもらった子供用のチョゴリは綺麗な薄水色で、ふわりと空気に膨らんだチマは真っ赤な紅色をしていた。

幼いなりに一生懸命に綺麗になろうと努力したのよ。

だからね、エンさま。

笑って？

「……そうですね」

苦みを増した表情で、エンさまは笑って返事した。

エンさまの心がより強く私のことを拒否したことをその笑みで理解する。
そんなことを何度も繰り返してきたから知っているのよ。

ねえ、笑って？ エンさま。

陽が西の山に傾く頃には私は本態である龍形を取って空を舞う。
龍族のなかで最も優美な龍形種としての姿を空に浮かべるの。
だけど、エンさま。

貴方は決してそれを見てはくれなかった。

暁の空に浮かんだまま、蛇かがちの里の奥深い山中にいる貴方を振り返っても、貴方はもういない。

門扉は閉まり、窓には分厚いカーテンが閉じられているの。
知っているわ。

私、
貴方が独りぼっちだって知っているのよ。

そして、私は安心してゐるの。
独りぼちな貴方に
安心してゐるの。

酷い子でしょう？ エンさま。

だけどわたし貴方が好きなの。
本当なのよ？

「人が、落ちた、と？」

エンさまのもとへ？

聞いたのは、蛇の里の長の報せから。

急いで駆け付けたわ、仕事もなにもかも放り出して。

辿り着いた先では、二人の姿がそこにあった。

「よいつしょおおお！」

「うう。腰痛い」

普段インドア生活してたから、これはつらい。

鍬を手にして畑を耕している落人おちうとの女と、近くに座り込んで草と

りの仕事をしているエンさまの姿。

「……………」

何も言えなかった。

もう、何も言えなかった。

「…ん？ お客さん？」

綺麗な女の子だあ。

首に巻いたタオルで汗をぬぐいながら手を振ってきたヨウコは綺麗だった。

一生懸命に土を耕して、土に根付いて生きようとしている姿は、生き物として綺麗だったの。

「……ファンリー、さま？」

どうしたんです？ 真っ青な顔して。

きよとんとした顔で、陽光の下でこちらを見たエンさまの瞳はもう孤独ではなかったの。

7

その場で泣きだしそうになるのを我慢して、逃げ出したの。

空、空、空。

どこかに異世界への扉があるといい伝えられる空へ。

どうして?

どうしてなの、ずるい。

ずるいずるいずるい、エンさまはずるい、落人はずるい。

神様は
ずるい。

「つつうあああああ」

空に舞ったわ。

自慢の水色の鱗を翻して、自慢の新緑のたてがみを戦がせて、ゆるやかに大気を掻きまわして空に舞ったわ。

涙がこぼれても誰も気づかないように。

綺麗な、綺麗な、生き物になりたかったの。

綺麗な、綺麗な、生き物になって。

強く、強く、強くなって。

私たちはようやくこの空を愛せるのよ。

蛇から生まれた突然変異。

それが、わたしたち龍形種の存在の意味。

なりたかったわけじゃないわ。

私たちだって、土とともに生きたかった。

太陽に焦がれながら、土の中で、樹の上で、仲間たちと一緒に暮らしたかった。

蛇でいながら、蛇でないと。

誰よりも自分自身が理解してしまう苦しみを。

卵のうちから気を帯びて、竜卵となって、共に生まれるはず

だった兄弟姉妹を失う苦しみを。

たまたま
同朋を殺してしまう苦しみなんで知りたくなかった。

脳裏をよぎるのは、父母の言葉。

龍形種たちの言葉。

エンさまはもう孤独ではないのね。

空を舞って、涙を散らして、そう理解してしまえる自分が少し哀

しい。

諦めと恐怖の滲んだ大蛇はもういない。

私と同じ、独りぼっちだった【仲間】おろちはいない。

エンさまを好きになったのは、あの人が独りだったからだ。
生きることの意味を考えることを諦めていたからだ。

危険種である【大蛇】は別にエンさまだけではない。
必ずしも、同年代に一人しかいないというものでもないのだ。
少なくとも、ファンリー自身がこれまでも何度か出会ったこと
はある。

彼等は、総じて独りだ。

本態である蛇型をとることを許されず、決められた邸の外へと出
ることを許されず、一人で死ぬことさえも許されない。

可哀想な、壊れた種。

彼等が自分を大蛇だと気づくのは遅い。

多くは成長期を脱した頃に、彼等は【大蛇】だと認定される。

繰り返し脱皮。それに伴う成長。

それが確定されたときに、彼等は絶望する。

全ての自由を奪われて、幽閉されるに等しいその運命に。

だから、彼等は壊れてしまう。早々に。

ファンリーがであったことのあった大蛇のなかには既に亡くなっ
たものも多い。エンさまよりも若くとも。

エンさまは不思議な人だった。
全てのことに怯えていて、全てのことに恐怖していた。全てのこ
とに諦めていた。

なのに。

あの人は生きていたの。

死を望まなかったの。

その強さが不思議だった。
その強さが好きだった。

綺麗になって、貴方と一緒に、

生きたいと思ったのよ。

ともに、と。

「うつわあ、趣味悪いわねえ。ファンリーってば」

「……煩いですわね、ヨウコ」

ようやく実ったとかいう桃の実を絞って作った桃のジュースを呑みながら、彼女と喋っていました。

「だって、エンの趣味ってあれよ？ 徹夜で模型つくりとかいうめちゃくちゃインドアなあれよ？」

別に模型が趣味なのはいいけど、見せる相手もないのに凝りまわってたあれよ？ 非社交的なオタク一直線。

目の前にはその模型をケースに入れてる途中のエンさまがいたのにもかかわらず、彼女はそう言い切ってみせた。エンさま自身は気付いているのかいないのか、作業に没頭していらっしやいましたわ。」「……どうしましょう。いますごくヨウコの発言に眼から鱗がポロポロ落ちまくった気がしますわ」

ふう。初恋フィルターって怖ろしいですわねえ。
ため息が漏れてしまいました。

「あーははは。落とせ落とせ、存分に落としなさいな。大丈夫よ、ファンリーは美人だからすぐにもっといい男が見つかるよ」

あたしと違ってね！

笑顔のヨウコの顔を見つめて、納得しましたわ。

「そうですわね、そうしますわ」

だって、わたしお嬢さまですもの！！

宣言してやりましたの。

「それでこそ、ファンリー！ 決め台詞がいいねえ。お嬢さま！」

「……ところで、ヨウコ？ その手に握ってるものはなんですか？」

見たところ、涼を得るもののようにですけども。

涙目で笑っているヨウコがぱさぱさと手に持っている竹と紙で作った道具を宙に泳がせていましたの。それがまたいい風を送

ってくれるという。

「んあ？ ああ、これ扇子っていうの。」

夏はさすがに暑いか

らねえ、エンに頼んで作ってもらったのよ」

なんなら、ファンリーにも作らせようか？

「……いいんですか？」

竜族のなかでは最も暑さに弱い龍形種としては、それは素敵な道具に見えました。

「いいよー。だって、あたしら友達じゃない！」

遠慮しないしない！

「……友達、でしたの？ わたしたち」

屈託のない笑顔で述べたヨウコを見つめながら、確認してしまい

ましたわ。

「えええ？ ファンリーは違ったの？ えええええええええ？？」
すごいショック！

がたがたとテーブルを鳴らして、驚いているヨウコの表情は本気でそう思っているようでした。

「ふ。 いいですわ。 しっかりと壊れにくくて美しい装飾の付いたその『扇子』とやらを私に提出出来るというのでしたら、友人と認めて差し上げますわよ」

出来ますかしら？

お嬢様にふさわしい態度でそう告げましたの。 もちろん、

私が嬉しいと思っていたことはこのちよっぴり鈍感な落人には気づかせませんでしたわよ？

「よっしゃ！ のったああああああ」

ちよ、エン。 何してんの、今からファンリーの扇子創るよ、ほらほらアイディア貸しなさい、アイディアー！！

私の発言に興奮したヨウコは、ホクホク顔で模型をどこに飾ろうかと悩んでいたエンさまの腕を引っ張り、ついでにその拍子にその模型を床へ落とさせて木っ端みじんにしましたけれども、全く気にすることなく工作部屋へとエンさまを引っばっていきました。

「ぎゃあああああ。 俺の模型5672号があああああああ」

「やかましい、今はそんなものよりも友情のが大事だ。 来なさい！」

ずるずると引っ張られていくエンさまと視線が合いました。

【……………（もう友達でしょ？）】

【……………（知りませんわ）】

目線だけでそう言いあつて。

それから笑顔で見送りました。

「お客様を放っておいていいと思ってらっしゃるのかしら、ヨウコってば」

からんと氷が鳴ったグラスの中にはもうジュースは残ってませんでしたわ。

お替わり、しようかしら？

初恋は実らなかったけど。
友人になら、なれた。

ともに。

ともに、生きてください。
けして離れることはなく。

あなたたち二人の幸せを願うから。

みんなで、綺麗に、強く生きましょう。
信じられるから。
きっと今ならそう

「ですから、私はまだ仕事中なんです」
「俺にも構え」

「却下です」

「却下を却下する」

「……却下の却下の却下です」

「却下の却下の却下の却下……！」

「……」

「……」

「飽きませんねえ、あの二人は」
「うふふ。面白いじゃない？」

リアディとカナの一進一退の痴話喧嘩を見ながらメイムと休息タイム。

「やっぱり、皆が一緒がいいわ」

「……そうですね」

過去を思い出しながら呟いたら、意外なことにメイムに同意を寄せられた。

「……」

「……なにか？」

ついメイムの顔を凝視しちゃったら、流石に質問されたので逆に質問したいことを質問した。

「……ねえ、うちのところのユインの告白って結局いまどうなってるの？」

「……！！！！ 何もなってますんよ」

かちやりとメイムが置いたグラスの中身がテーブルクロスに零れたわ。そこから漂ってきたのは桃の匂い。 あのころと一緒

あの場所は今もなくなっても、あの二人の育てた子供たちが住む場所には桃の木が今日も実っている。

「ふふふ。」

恋せよ青年。恋せよ乙女。

命短し、

時は逝くなり」

にやにやと笑いながら、今日も空には龍が舞う。

優美な姿を見せつけながら、
すために。

大切な過去の時を思い出

了 by 御紋

時間軸不明。

【説明不足のため補足】

・ 竜の卵は地上で最も固い卵殻をもつ。 竜形種＞羽ある蛇形種＞
龍形種の順番に固い。

・ 卵のサイズは約80センチほどの高さの楕円形。
・ 龍形種（突然変異体）は最初は蛇族と同じサイズから始まるが、
徐々に水気を生じるようになると膨張して拡大していく。結果、同
じ場所へ産卵されていた卵たちは竜卵によって押しつぶされて破壊
される運命になることがほとんどである。

以上、補足終了。

登場人物（人・竜・蛇・ゲスト）紹介 7以降v r・（前書き）

こちらは、竜の世界にとりつぷ！ シリーズ7話以降の人物紹介です。

些少とはいえども、ネタばれになるおそれがありますので、本作をお読みになられた上でのスクロールをお勧めいたします。

よろしくおねがいします。（ぺこり）

登場人物（人・竜・蛇・ゲスト）紹介 7以降vr・

竜とり！7以降からの登場人物設定

地球世界

岩倉佳永 （28歳女性・頑固・最後の希望に縋りついでる途中）

主人公。地球では、岩倉武道館師範代行を務めていた。
ある日、デッキブラシと一緒に《動物が人へと転化する世界》へと落ちてきた。おちこみ落人。

その際に竜族のリアディに庇護された。
女子力がないためメイドの仕事が出来ず、代わりにご主人様の新しい【竜族の竜形用サロンもどき】を手伝うことになる。

父母が事故死した5歳のころから養育してくれた祖父に叩き込まれた武術の応用で仕事は順調にこなせていたのだが、突然竜族の長にお城へと召喚される。

新しいお仕事は、長の事務仕事の雑用兼逃走防止役。
新しい癒しは、仔竜ちゃん。

以前のご主人さまであつたりアディさまとはげふんな関係であつたが、断じて恋人とかではないことは強調したい28歳の主張は未だにそのまま残っていたりする。

愛すべきクソジジイへの屈折した愛情表現は、そろそろと真つ当

になりつつある。

ワーカーホリック？ いえ、ただ『働かざるもの喰うべからず』という信念に沿っているだけです。

腹は6つに割れた茶髪黒目の女性。酔うと色気が増すらしいが、拝んだことがある者は少ない。

いいかげんに腹あ割って話して頂きたいんだが、どんなものだろうか？ 28歳頑固女性よ。

一言。

「だから、早く帰りたいって言ってるんですよ」

…どこまでも頑固なお人である。

岩倉 宗吾

(79歳老人・くそじじい・師)

佳永の祖父。武道についての師匠でもある。

岩倉武道館の館主。町の人に愛されるクソジジイ。

現在の彼女の数は8人。交互にじじい…岩倉家の家事をしてくれる優しい女性たちをゲットしている。門下生曰く、男の夢の老後。

見合い結婚だった妻への愛情は深く、実は一目ぼれだったらしい。(本当にどうでもいい)

好きな花は桔梗。(妻の好きだった花)

現在、佳永の幼馴染であり門下生である童顔親父を夫婦ともども養子にできないかと思案中。

自由に生きる御老人である。

一言。

「わしはわしの答えしかもっちゃおらんよ？　だから、佳永も自分で答えを探すしかないのさ」
わーははは。

本気で、この爺に勝てる人がいるのかと思う、今日この頃。

童顔親父

佳永の幼馴染。岩倉武道館の
既婚者。　嫁にベタ惚れ。
最近、師匠の眼が怖い。　友人の失踪に心配している。
名前はまだない。

友人

佳永の親友。童顔親父の嫁。二児の母。クソジジイのふあん。
名前はまだない。

夫婦からの一言。

「名前くらいつけてから紹介しろ（て）！！！！」

…だって、出るかどうか本気で怪しいんだもん。

竜世界（現在）

長の一族

balan ぽにやらら。

（竜族の長・天然役者・精神的な自由を求めるが常に駄目押しされる運命を背負っている中年竜族）

個人主義な竜族を治める世襲制の長の一族の、現長。お城の主。竜形種。

長は常に「balan」と呼ばれる。セカンドネームにbalanが入るのは、次期長の候補という意味。

どうでもいい？

嫁は二人。子供は5人。（養女もいるよ？）

現在の佳永の庇護役でもあり、お仕事の上司でもある。

基本人格と、長用人格と、仕事用人格、パニック用人格があるとのこと。

基本人格はのんびりした中年男性である。愛情一杯。

心が浮き上がっているときは内股で走り去る人。もち

ろん、プライベートのときだけだよ？（冷や汗）

一言。

「俺だって、美味しいもの食べる旅にいきたいよおおおお」

…あきらめて、長。

イオ・ス・ほにやら。（バランの第一夫人。スは敬称）

第一夫人のイオさまは第二子リフェールの母親。すでに嫁入りした長女がいるらしい。

竜形種。

いろいろとあって人見知り。ちょっと子育てに苦労しているらしい。

第二夫人のミランダさまが本気で頼ります。

一言。

「本当に……。」「（涙目）」

ミランダほにやら。 (バランの第二夫人)

ミランダさまは、長男と三男の母。 次女は、現在世界漫遊の旅をしているのかなんとか。

竜形種。

元はバランさまのお仕事を手伝っていた。 結婚したのは実はイオさまよりも早かったりするよ。 恋愛結婚。

イオさまとの仲は良い。 (ある意味、バランさまとミランダさまの嫁がイオさまなんじゃねえのかとも思うよ)

病弱なりフェールの子育てに参戦中。

己の子供は結構強いので、さばさばと子育てしてます。 (子供部屋もあるしね)

一言。

「仕事も好きだったけど、子供育てるのも好きよ？ 大変だけどね」

尊敬します、お母様。

トラオム・バランほにやら。 (16歳)

バランさまの長男。 (生母はミランダさま)

最近の楽しみは三男のガ プくんを愛でること。 次男になか

なか会えないのが不満。

佳永とはその意味でツボが同じなので、いい趣味仲間。

人形での身体の扱い方に不慣れ。 今まで竜形でも支障

がなかったからだが、そろそろ部屋が手狭になってきたので、人形の練習を始めたところである。
基本的に好男子。

一言。

「うーん。俺も旅はしてみたい気もするけど、今は弟たちを愛でるのに忙しいから別にいいや」

……ブラコン？

リフェール・ balan ほにやら。 (6歳)

balanさまの次男。(生母はイオさま)
病弱。
頭はいいけど、喋りは特殊。

一言。

「明日の天候は恵まれる。風が言っておるよ」

6歳、
ですよ？

ガ プ・ balanほにやら。 (2歳)

balanさまの三男。(生母はミランダさま)

白色の竜体に、赤色が混じったたてがみを持っています。

まだまだ、仔竜ちゃん。 皆の癒し。

興奮するとたまに幼児語が混じるよ。

一言。

「お昼寝してたら、いやいやされるの。 いやいやされるの、大嫌いにゃの!」

(直訳・お昼寝中に悪戯されるのは大嫌いなのだ!)

…… 佳永さん(とたぶんトラオムさま)、大ピーンチv

城勤めの人々

チエイサほにやら。 (竜族竜形種上位種・竜族大老)

竜族の上位種。竜族の群れの大老を務める御老体。男性体。
基本イメージ色は赤。

竜形での鱗の色は銅色。磨くと光ります。乾燥肌。
人形では竜とり2に明記したまま。（身長187センチ。必要最低限の筋肉。赤い髪に薄い髪がちら混じっている。ちょっと中年風。眼のあたりはややくぼんでる。イケメソ認定済み）

仕事と趣味をかねて、世界に点在している蛇族の里を巡る趣味がある。

楽しそうなことには躊躇なく手を出す困った御老体。

孫も曾孫もいるそう。

佳永のことは「落人どの」、リアディのことは「リアディどの」で呼ぶ。

一言。

「うーむ。紹介文が前回と変わっていないのだが。
はよくないぞー？」

手抜き

…あなたについてはもう紹介せならんことが他にないのでこれでいいんです。

ファンリーほにやら。（竜族竜形種・お局）

龍形種の代表格。龍形種の正装は、韓国の正装でもあるチョゴリとチマ。

言葉は丁寧でも基本的には女王様。やりたいようにやります。

女性ですがそれなりの地位についてる上位種。 長の一族の

教育係を一任されていらっしゃいます。

昔はいろいろと恋愛で燃えたいらしいですが、今は普通のお婆ちゃんしています。 つつても、隠居はしてないけどもね。

龍族龍形種の「ちいさきもの」たちを養育されてるらしい。（自宅では）

佳永への呼び掛けは「あなた」「佳永さん」、リアディを「リ坊」と呼ぶ人。

ぶつちゃけ、リアディが生まれて初めて見たのはこの人。（「導きの手」と称される第二の親的存在にあたる）

エンとヨーコとは親友。

一言。

「だって、わたくしお嬢さまですもの」（キャッチコピーか？）

ユイン （竜族龍形種・女性体・子守りメイド）

竜とり5からの出演者。

城の子供部屋につとめるメイド。 龍形種。

お花の付いたツインテールがトレードマーク。

竜族のリアディのファンで、蛇族のレイヤの友人。 好きな

人は蛇族のメイム。

レイヤとは逆に能力が他よりも鈍く、そのために訪れた場所でツンツン時代のレイヤに出会った。友人。

イメージカラー は薄黄色。

もちろん正装姿はチョコゴリとチマ。 ファンリーさまに「

ちいさきもの」^レとして育てられたあと、お城に勤めることになったメイドである。

基本的にお喋り好き。たまに墓穴を掘る発言がある。

一言。

「うつつ、ぜんぶ私がいけないんです。ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

ただいま、猛反省中。

アライア （竜族竜形種・女性体・子守りフェロモンメイド）

竜とり7からの出演者。

ユインの同僚。仕草の一つ一つにフェロモンを放つ女性体。イメージカラ は、…薄紫かな？

チョリ（下に着るシャツ）とガ グラ（スカート）の上にまとったサリ（纏う布）が似合います。既婚者の証であるビンディ（額の印）と鼻ビンディは黒目がちな彼女の表情をさらに艶美にするそうな。

とある場所でミランダさまに拾われた。彼女を尊敬している。

旦那は同じく城勤めの騎士。お城の近くに住んでる。

天パがかった髪の毛。くるんくるんくるんの栗色。

一言。

「お仕事があるって素敵でしょ？」

女相手にフェロモン禁止 ！！ （うっかり見惚れてまうやら
！！！！）

サラエほにやら。 (竜族竜形種・火属性・女はくどくのが
礼儀)

8にて出演。

珍種扱い、芸人扱いしてくる竜の里 (正確には城の上層部) がき
らい。

でも、メイドさんは可愛いのでつついホイホイされてきてしま
う、そんな彼である。

年齢は若く、20代後半。

まだまだ属性を扱う技 (焰を生んで育てる『実焰^{じつえん}』やそこにある
炎を操る『炎燥^{えんそう}』、純粹に火の温度を上げていく『純火^{じゅんか}』がある)
はまだまだ修行中の身。

一言。

「俺だって、嫁欲しいよ!!!」

だったら、誰でも口説く癖をなんとかしろ。

以前までの佳永の仕事場所の人々

リアディほにやら。 （竜族竜形種上位種・守銭奴・大蛇の養い子）

竜族の上位種。無駄にイケメン。黒髪黒目。見た目は20代後半。佳永を保護した（元）ご主人さま。 独身。

通常なら同族種の「ちいさきもの」を保護するセオリーを無視して、蛇族の「ちいさきもの」たちを保護してるあたりが変人。

竜族の大老であるチェイサさまをはじめ、なかなか持つてるコネは豊富な商人である。

実は家事も万能、農業にも詳しい、万能口ボである。 仕事の多忙さと立場を踏まえた結果ほっとんど最近はしてないけど。

ميمとは主従な関係。 けっこう大事にしている。（義兄弟的關係でもあるので）

蛇族の危険種である【大蛇】のエンほにやらに養育された。育ての親である落人のヨウコにしこまれたおかげで、彼は万能口ボになれたとのことである。

竜体は漆黒色。

無意識にか本態を佳永には見せたことがない。

兎族のルイとは商売上の知人。

相手が自分を嫌っていることは知っているが本人は気にしてない。

そのへんはルイさんも隠そうとしてないし、意外に似てるのかな？
（プロ意識的ななにかとかが）

主人公とはせふりどまり。 最近の（むしろずっと）本編
での扱いがひどいのでちょっと愚痴りたい竜族ナンバーワン。

一言。

「ようやく話せたと思ったたら出番奪うつて、お前鬼だろ？ なあ！
！！」

ははは、何を今さら。 キミへの仕様は常に鬼畜な愛に満
ちたものにしようとは私は既に決めてあるよ？ （作者からの愛の試
練だ愛の試練）

トール （蛇族上位種・元部下その一）

蛇族のエリート。文武両道タイプ。男性体。姉はウルティカ。
自らに求められてる役割と立場を理解して責任ある仕事をする、
女性にもてる典型。でも独身。

佳永からの信頼も厚い。理解力・行動力に優れている。 レイヤ
とは親友。

基本、佳永のことは「カナのアニキ」と呼んでる。

一言。

「俺らだけじゃ、お仕事出来そうじゃないんでいまはゑすて

はしてないんですよ」

レイヤ （蛇族上位種・元部下その二）

蛇族の問題児。能力が先祖がえりで強すぎるため、首の後ろに能力封じの紋が浮かんでいる。

脳筋族だが、咄嗟の場合の生存反応はすばらしい。理解力は悪いが対人スキルは悪くない。

佳永を呼ぶ時は「アニキ」と呼ぶことが多い。

彼女というか嫁あり。（ウルティカさん）。トールとは親友。ユインとは知人。

一言。

「え？ 最後のお別れ場面での告白はなあ。……女なら怒るんじゃないかねえかなあ？」

さすが嫁もち。女については一家言を持っていそうである。

ウルティカ （蛇族上位種・メイド）

蛇族のメイド。トールの姉。レイヤの嫁。佳永は「佳永さん」呼び。

口調、物腰ともに美人。

一言。

「……最近、ご主人さまがご機嫌悪くて困ってるんですよ」

笑顔ですっごい大迷惑とか思ってたそう……おや、誰か来たようだ。

メイム （蛇族上位種・無口・大蛇と落人の子）

リアディさまの番頭さん。

頭もいい管理職。 出生に些少の特殊性はあるものの普通にお仕事人ですこの人。

リアディさまとは生まれた時からの付き合い。メイムさんのが年下。

旅に出てる妹がいるとか何とか。

一言。

「 ……赤字は困りますね 」

え？ それだけですか？

ロッドリー／ユピノイアン （蛇族上位種幼生体・以前の佳永の癒したち）

リアディが養育している小さきものたち。
ただいま、絶賛人の言葉勉強中。

佳永が大好き。佳永がいなくなって寂しいらしい。

3匹からの一言。

【…ふええ……………ばかあああああああああ】（合唱）

…ちびちゃんたちに泣かれた！！　ご、ごめんなさい。

ゲストキャラ

ルイほにやらら　どの。　（兎族上位種男性体・大商人）

兎族の商人。同じく動物世界シリーズ「兎の世界にとりつぷ！」を執筆された汐井さまのオリジナルキャラクター。

鬼畜眼鏡属性とのこと。

嫁…になればいいのに嫁じゃない嫁がいるそうです。（説明ヘタだな御紋）　「オーナー」と呼ばれている。

竜族嫌いだが、比較的落人には優しく接される。

当方での執筆については、汐井さまに文面チェックして頂いたうえでの投稿をさせていただいています。本当にありがとうございました！

（過去より）

エンほにやら。 （蛇族上位種【大蛇】男性体・へたれ・模
型オタク）

危険種【大蛇】に認定された蛇族。
生活には困らないが、常に人形で過ごすことを条件つけされてい
た。

落人であるヨウコに出会い、いろいろとインドアからアウトドア
になるなどかき回されて、成長したらしい。

メイムの父。リアディの養い親。ファンリーの友人。元へたれ。

一言。

「いろいろとあったけど俺は幸せだったよ。子供たちにはいい父親
だったかはわからないけど、幸せになってほしいなっと思っていても思
ってる」

ありがとうございました。

陽子^{ヨウコ}

（落人・女性・農業ガール）

エンのもとへと落ちてきた落人。

土に根差した農業が趣味。

そのためなら、蛇の里の長に

も直談判しに行く。

子供を生んで、ようやくエンが蛇だったことを思い出すほどには
おおざつ（げふん）。

メイムの母。リアディの養い親。ファンリーの親友。

一言。

「え？ 生きたもん勝ちつてのが親の口癖だったので。あの
高さから落下して生き延びれた時点で命一個拾ったようなもんだと
思わない？」

ありがとうございました。

それは懇願 （メイム編）（前書き）

今作「それは懇願（メイム編）」は脇役とはいえどもキャラたちの死ぬシーンが含まれています。

もしも、そんなのは嫌だなと思われる方がいらつしゃいましたら、読まないほうがよいかと思います。

個人的には人が死ぬ姿というのは、人生の最後の生きざま（集大成）であり、子供に与えることのできる親の最大の遺産であるとおもっておりますので、遠慮なくあげさせては頂きましたが。

残酷描写は含まれてはおりませんが、敏感な方にはつらいかもしれませんので注意事項としてあげさせていただきます。

自己責任にてお読みください。（ぺこり）

それは懇願 （メイム編）

「それは懇願」 （メイム編）

「メイム、メイム」

眠たいんだったら部屋で寝るか？

うとうととしていた自分にそう尋ねたのは、兄だった。

「……だいじょうぶです」

ここにいます。

頭をふらつかせながら答えた自分に兄はため息をついたあと、傍を離れたと思ったら寝室から掛け布を持ってきた。

小さめの一枚は既に眠ってしまっていた妹にかけ、大きめの一枚は自分とメイムの身体に巻きつけて。

「眠くなったら、俺の肩を枕にしていいいんだからな」

「……はい」

4つ上の兄はその細い肩を指差してそう言いました。

その日は月も星も隠れた夜だったことを覚えています。

「…ヨウコ」

「ファンリー」

来てくれたの？

寢室の布団に臥していた母が身体を興そうとしたのを、父母の友人でもあるファンリーさまが慌てて止めていました。

「…うん。やっぱり身体が重いわ」

「……そう」

自らの体調をそんな一言で終わらせた母に、涙ぐんだファンリーさまが返事をしていました。

「ねえ、子供たちをお願い出来る？ リアディもいるしあの子たちも無事に転化をすませたし必要なことはすべて教えたくもりだから、きつと迷惑にはならないと思うんだけど」

「だけど、やっぱり少しだけ心配なのよ。」

母、ヨウコはそう言いました。

「うん、…心配よね」

よく、わかるわ。

子を持つ親でもあったファンリーさまがその言葉に頷いていました。

「大丈夫よ、あの子たちは私が後見に立つわ。」

あの子たち

の望むように見守りましょう」

「ありがとう、ファンリー」

母がそう呟き、静かにその傍で見守っていた父が同じようにファンリーさまへ頭を下げていました。

母が言葉を失い、眠りのなかで息をひきとるまでの時間。

ときに友が沈黙のなかで寄り添い、子が母を呼び、その手を握る間。

父であるエンは僅かながらの荷物を選び分け、様子を見に来てい

た知人たちへと指示を出していました。
母と同じ場所を離れることなく。

その日に邸に集っていたのは少なくはない人数でした。

この奥深い山にある邸には、主である大蛇エンの一家しか普段は存在しません。

たまに訪れる主夫妻の友である竜族のファンリーや、蛇かがちの里の長、その程度しか訪問客のない通常でありました。

ゆえにその日初めて見た竜族の火竜たちは、どこか怖ろしい気配を保っていました。

夜の深まった頃、父の泣き叫ぶ声が聴こえました。

それがきつと全ての合図。

「…ヨウコ」

はらはらと涙を零したファンリーさまは、わたしたち兄弟をしつかりと抱きしめた。

「ファンリーさま、泣かないで？」

ファンリーさまが泣くと私も哀しくなるよ？

妹が幼い声でそう告げました。

「ええ、そうね。でも、少しだけ許してちょうだい、マリ
アム」

今はただ友を悼むことを私に許して。

子供たちを抱きしめて泣く彼女は、子供たちを護るためにはなく倒れそうになる自分を支えるために抱きついたようにも見えました。

「…ファンリー。子供たちを連れて避難しろ」

泣いた彼女に声をかけたのは竜族の重鎮。 チエイサさまでした。

「…エンさまにお逢いしてからでも間に合うでしょう？ 私 は 彼 等 の 友 だ す」

会わずになどすませられるはずもない。

怒りではなく、何か強い意志によって彼女はそう告げました。

ぴりりとより一層空気が険しさを帯びたようでした。

その時、父は現れました。

永久の眠りに就いた母をその腕に抱きしめながら。

「 エンさま！！」

「…ファンリー」

まだいたのか。

父はただそう呟きました。

暗い暗い夜でした。

まだほのかに温かい母の手を握り、永久の友情をと呟いたのはファンリーさま。

そして、沈黙する父にもまた「永久に」と呟いて、我らは父母のもとを離れました。

「エンさま」

「父さま」

「父上」

壊れそうな絶望と、安堵したような思いを身に持つ父と最後のキスを交わして。

【こんな父親ですまなかった】

最後に触れた父の感情へ否定を返しながら。

【それでも、貴方がわたしたちの父親です】

兄弟を代表するようにして、義理の兄である竜族のリアディがそう伝えていました。

暗い夜の奥深い山の中。

蛇の里の長とその付き添い、竜族の大老チエイサと竜族龍形種ロンけいしゅが一人、ファンリー。それから招請された火の竜たち。 危

険種【大蛇おんち】と落人おちうどヨウコの子供たちが見守る中で火は放たれました。

夜闇を照らしたその煌々たる火のなかで消えたものは、大蛇エンに与えられていた彼の檻たる邸が一つ、そしてその彼の愛した人の亡きがらが一つ、 今を死ぬときと決めていた彼自身でした。

火を操るすべをもつ竜族の火の竜たちが放った火は、死して本態たる姿 山一つほどに育った父の蛇形を曝させることなく、人形のままの父を燃やしつくしました。

【大蛇】として生まれたものの末路は常に決まっています。

常に、常に、封じられたままに生きて死んでいく。

それを哀れというだけの立場は私にはありません。今も昔も。

離れた場所で、その火が消えて闇が戻るまでの間、私たちを兄としか呼べぬ彼が抱きしめてくれていました。

「愛されたことだけに胸を張れ それが誇りになる」
呟いていたリアディさまを、私はずっと主人と呼んでいくでしょう。

尊敬する兄を、生きる指針である主と仰い^{あるじ}で。

その後の我らは、竜族の里で独立することになりました。
後見人はファンリーさま。

ご主人さまが仕事に選んだ商人という立場を補佐しながら過ごす日々、あるときリアディさまが人を連れ帰りました。

「彼女はカナ。 俺が庇護する」

デッキブラシと彼女が呼ぶその道具を握りしめたまま、出逢ったばかりの彼女は叫びました。

「これからよろしくおねがいします！」
綺麗な立礼の姿でした。

「 こちらこそ、よろしくおねがいします」
返すように、自分も礼を返しました。母に教えられたままの行儀作法で。

その後の彼女はなかなか有能で。

思いつきのままに仕事をするリアデイさまの補佐の業務で、だいぶ楽をさせていただけることになりました。

「……ご主人さま。いいかげんに本音で語ったらどうなんですか？」

「怒られそうで怖い」

知らない間に父のへたれを受け継いでいたらしい長兄に呆れる羽目にもなりましたが。

「今度、マリウムが来たときにリアデイさまの失恋話を披露することになりそうですねえ」

「嫌なことだよ」

返事したご主人さまに、心から思います。

「だったら、もっとしっかりと彼女を捕まえてください」

夜を共にする程度には情がわいているというのなら。

早く、早く、繋ぎとめることです。 この世へ。

喪われた母が、死を求めていた父を繋ぎとめていたように。

あなたの礎となる人を、捕まえてください。

それがきつと、わたしたち家族が幸せだったあのころを蘇らせることになるから。

「貴方も幸せになるべきです」

恋を知って弱くなった、たった一人の尊敬するご主人さまへと願
いましょう。

了
by 御紋

それは懇願

（メイム編）（後書き）

……お読み頂きありがとうございました。

心から、それでも彼らはきっと幸せだったと告げてくれる強さを
持つてると信じています。

では、読んでいただきありがとうございました。

それは熱量 **（サラエ編）（前書き）**

落人は一人も出てこない物語です。
竜たちだけのお話。

ちょっと変わった竜の世界の側面だと思って、お読みください。

それは熱量 (サラエ編)

「それは熱量 (サラエ編)」

ふと目覚めたその日は世界が美しく見えた。
何が変わったわけでもないのに、よく食べてよく眠ったその日。
目覚めとともに、世界に許された気がした。

「へえ、これは貴重な…」

火属性の竜か。

目の前で呟く相手にいらいらした。

「なんだよ！ 俺は見世物じゃない！！」

声を張り上げて、俺より8つは年上だったクロム・バランに叫んだのはもう20年は前の話だ。

「……なるほど。元気ですね」

にこりと微笑んだ姿は、次代の竜の長として足らぬものはないよ

うに見えた。

属性と呼ばれるものがある。

竜の一族だけによるものなのかは不明だが。

その種類は、主に5種。

水、火、土、風、木。…金と呼ば

れる属性は古代種が持っていたといわれているが、まああくまでもそれは伝承だ。見たことのある奴はいない。

竜における属性の比率は偏っている。

水に親和性を持つ竜族における水属性の竜　水竜の比率は凡そ7割。

土を纏い、土に暮らす土属性の竜　土竜が2割。

残る一割の個体数はどんぐりだ。

風を纏い、雲を起こし雷を発することができると称される風属性の竜　風竜。

木の育成を助け、実りを整え、大地を癒すとされる木属性の竜

木竜。

そして。

火を噴き、火を操り、死を与える火属性の竜

火竜。

俺は火の竜だった。

「師匠。はら減りました」

「うむ。肉を焼け」

俺が火の竜だということは、見るものが見ればすぐに判ることらしい。

赤い髪たてがみに赤い鱗。…それに加えて、竜紋が全てを語るらしい。

まあ、赤い竜体。火竜ではないので、竜紋と呼ばれる竜の鱗に浮かび上がる独特の紋様がなければ、わかりにくいかもしれませんがね。というのは某次代の族長さまの云い分だ。

けっ、俺が知るわけねえだろばあか。

……口に出して言う前に、笑顔の往復びんたが降ってきたので俺は言ってない。何にも言ってないですよ、言えなかったもん。

「安心しろ、補助はしてやる。実焰と純火の複合能力だ。や

れ」

「俺、たまには焦げてる半生以外の肉が喰いたいよ」

「じゃあ、自分の能力を磨くことだな」

頑張れ、少年。

火竜の能力の師匠であり、巡礼者でもあるサイヴルが己の食事に戻った。

中までしっかりと火が通り、肉汁滴るステーキ肉は美味そうだった。

「……つちくしょう！」

くるりと振り返ると、自分の分の生肉に塩を振り、しっかりと揉みこんでから手近にあった蓮の葉を濡らしてから肉を包んで、浅く掘った土の中に入れた。

土を被せてから、その上に小枝を組む。

（師匠くらい能力があったらこんな作業しなくても十分なんだけだな）

そんなことを思いながら、意識を集中させた。

火属性の能力を、竜たちは3つに分類している。

実焰^{じつえん}、炎燥^{えんそう}、純火^{じゆんか}の三つ。

そして、それらを総称して

『炎舞^{えんぶ}』と呼ぶ。

俺が炎舞を行う際の補助具に使っている道具を取り出す。

「……まだ、そんなもんがないと使えんのかおまえは」

「その方が、確実にこなせるんですっ!!」

まぐまぐと肉を噛み切ってる師匠には文句は言わせたくはないと思つた。

取り出したのは、調律用の小さなクラッカーだ。

糸で括つた錘が二つ。

錘の反対側を、右手の中指に通したリングに通して結び付ける。

糸の長さは同じでなくちゃいけない。

振り子を使つた玩具だ。

指を上下にタイミングよく振ることで、錘はぶつかり、一定の速度での音を発する。それだけの道具。

もっとも、これを扱うにもコツがいるんだけどな。

こつこつこつこつ。

小さな錘は俺のために時を刻んでくれた。

眉間の上に意識を集中する。

耳は音を拾い、体感する律を補正してくれた。

その音を基本に、火を生むのだ。

幻影のようにただよう気^{オド}を拾い、煽る。

速く速く速く。

空気を擦り、熱は生じて、回転する。

回転した熱は酸素を取り込み、さらにその熱を上げていく。ぱちりと熱に曝された空気が音を立てる。

「……実れ、焰ッ!!」

命じれば、火は実^{シツ}となつた。

小さな火の穂が最初に生まれた。

木々を喰らつて、それは大きく育つた。

「おお、すごいすごい。ちゃんと生^なつたねえ」

冷やかしの声が聞こえたがそこは無視だ。

どうせ、俺の実焰は小さいし、遅いよッ。

【いいけどさあ、実焰はスピードが命の技だぜ】

こんなチビに出来んの？

忘れもしない、師匠との初対面のときの愚痴は多感なサラエ少年のなかでは十分なトラウマになっている。

上下に振るクラッカーは、素直に音を鳴らしてくれている。

その音を元に、炎となった熱を操る。

焦げないように。

焦げないように。

腹が鳴りそうなほどに空腹なサラエは、必死だった。

こつこつこつこつ。

「ふあ。眠い」

先に食事が終わったらしい師匠がごそごと転がった音がした。

「まだ寝ないでくださいよ！ 補助してくれるって約束じゃないですか！」

「ああうん、火事には気をつけろ」

それだけはガチで気をつけろよー。んじゃおやすみー。

がさごそと動く師匠の気配が増した。寝る気が、この

ろくでなし竜！！

「あんたなあ、たまには師匠らしく指導の一つもしてくれよー！」

つい、キレた。

「……………あ」

「……………え？」

サイヴルが呆けた顔で、肩にかけてた野営用の毛布から指を出していた。

俺の大事な夕飯（予定）の方向に向かって。

「燃えてる」

「俺の肉！！！」

ちよつと眼を放してたら、火が暴走していた。
わたわたと、消火のために土をかけたり師匠に泣きついたりして
何とかかんとなつた頃には、俺の飯は半生焦げ飯へと進化してい
た。

退化じゃないんだ、退化じゃないっ！！

「炭化？」

「どや顔で言つてんな！ バカ師匠！！」

「やかましい、くそチビ。美しきお師匠さまとお呼び」

なんなら、麗しきお姉様でもいいぞ。

「ぜつってえ言わねえ！！」

「生意気」

そう言いながら師匠は、暴走した火のせいでまるまる燃えた小枝
の炭を放り投げてきた。

俺は絶対信じない。

火竜の一人、竜族のサイヴルが目下のところの「炎舞」の第一人
者だなんて。

そして、竜族の美女20人のなかに入ってるなんて、そんなこと。

「俺はぜつてえ、信じねええええ！！」

「やかましい、ガキ」

早くその炭喰つて寝ろ。

俺の荷物を丸ごと投げてよこした師匠なんか、美女なんかじゃね
えやい！

「師匠……」

「バカ弟子が」

朦朧とした意識のなかで、師匠の声を聞いた。

巡礼と呼ばれるシステムがある。

それは、竜族の火竜たちに符合するシステムだ。

「本気ですか。クロム・ balan」

「ええ、そうですよ。美しきサイヴル」

目の前に立って俺を睨んでるのは、橙色のメッシュが前髪に入ってた女だった。

「いくらなんでも巡礼に連れ出すには早いでしょう。こんなチビ」

「ですが、もう決まっただんですよ。サイヴル」

対は貴女です。

「……貴方が長になれる日が頼もしいような怖いような感じがしますよ。クロム・ balan」

「光荣ですね」

にこりと返した長の長子は、一歩下がった。

大きなため息をついて、代わりに一歩前へ出た師匠が差し出した手は、かさかさでそっけない手で、でも暖かい、そんな感じがした。

「お前なんか、対じゃなくて弟子だ弟子。」

それで十分に

しょう？」

「お好きにどうぞ」

我々《balan》は関与はしません。

「……とりあえず、あんたへの土産は今後一切買わないことにしたよ」

ざまあみやがれ、天然腹黒多重人格。

「そんな、ひどいです！！ サイヴル！」

僕の楽しみはそれだけなのに！

舌打ちをしたあと、仕返しにクロム・ balanの楽しみである各群れの特産土産は買わないと宣言した師匠と、素直にショックを受けた長の嫡子は仲がいいのかなとか思ったのは覚えている。

巡礼者はレイラインを巡る。

レイラインとは、いわゆる聖跡が一直線に並ぶラインのことを言う。

大地のエネルギーの通り道といわれるレイラインはそのラインを

中心に雌雄の二本のエネルギーラインが蛇行していると言われる。

アボロ
雄性のラインは天の父神を崇める聖跡を辿る高所のライン。

アテナ
雌性のラインは先と比較して力は弱いものの、井戸や泉、または地母神などを崇めたとされる聖跡をたどる。

それに付随してか単純に婚活的な意味があつてのものかは知らないが、火の竜たちは対をなして巡礼をこなす。

ウリウリ
右行と呼ばれる女性の火竜。

キリウキリ
左行と呼ばれる男性の火竜。

巡礼する彼等は、レイラインのエネルギーを吸収し、己の持つ能力を鍛えるとともに、近辺の群れの警備や里を離れた場所で生活する竜族たちの様子を見る。

レイラインの近辺に己の棲みかを選ぶ竜族はなにしろ多いから。

おかげで、レイラインの別名をドラゴンラインともいう。

まんまだとかいうな。

以上が、『どうでもいいけどそろそろ師匠起きてくんないかなあ』とか思う巡礼歴5年目に突入したサラエ少年による判りやすい巡礼者の説明であつた。

「お師匠さあん！ 荷物の番はいいけど、そのまま爆睡ってひどくないですかー」

俺は、井戸まで水汲みに行つてたつぷーに。

「……………ん？」

半分諦めつつも様式美で叫んだサラエ少年だったが、彼の保護者兼対である師匠のサイヴルは惰眠を貪っていた。

「そうですよね、師匠ってそう言う人ですよね」

いいんです知ってました、ええ。

二度寝に入った師匠を横目に、お湯を沸かしだしたサラエだった。汲みに行く前に鍋へと移しておいた残りの水を地面に置いた。

「熱を熾せ」

燃え草もない地面におかれた小鍋の中で水から追い出された空気たちが泡となつて上つていくのが見えた。

純火 熱を操る炎舞だ。

「さて、お茶でも沸かすかあ」

沸いた湯に茶葉を入れて、二人分のコップに注いだ。

いい匂いが経ちあがる頃には、要領のいい師匠どのは目覚めるところだろう。

「そういえば、そろそろ《Jの会》があるぞ」

「まじっすか！」

やりっ、稼げる！

にんまりと笑ったサラエ少年は、巡礼者たちの集いである《Jの会》に参加するのは既に5回目だ。

酒がつきものの宴会に、まだ若いサラエはちんまりとしているしかないかと思われがちだが。

気さくな火竜のおやじたちは賭けカードの相手がいなくなるとサラエを巻き込む。

そして、酔うとともに負けていくおやじたちはサラエに小銭を稼がせてくれるのだ。

「ああ、ピッシーノがおまえと遊びたいとか伝言廻してきたぞ」
「まだ俺を着せ替えさせる気ですか、あの婆さんは！」

同じく巡礼者の先達でもあるレディ・ピッシーノは手芸を趣味にしている火竜の貴婦人である。まだ幼い少年であるサラエなんぞ着せ替えさせてなんぼだろうという変わった信念を持っている。

「……伝えておくか？ それ」

今ならまだ廻せるけど。

渡りの鳥族から届けられた文を折りたたみつつ、師匠が尋ね返してきた。

「止めてください。俺はまだ女になりたくはありません」

むしろ、ずっと男でいたい。

着せ替えサラエの半分以上の衣装はなぜか女性の格好である。

そのような屈辱の選択を強いる火竜の婆どのにも言えるものなら言っておきたい少年サラエの本音だった。

鳥族に一粒の銀を渡しながら、すぐ次の竜族のもとへと文を回しに行くよう促した。

鳥族はその羽をはばかせ「まいどあり」と言うように、一度空を回った後に次の待ち人のもとへと去って行った。

そして。

ちゃりんともう一枚の銀が俺の財布から師匠の手へと移っていくのを下唇を噛みながら見守った。

「よかったな、優しい師匠で」

「……………」

ピッシーノの婆さんへの告げ口という名の文を付けたそうとするのを止めたサラエ少年に、口止め料をねだった師匠が『優しい』といえるのかは残念ながら不明である。

（俺は、優しいなんて絶対ぜえたい！認めないんだからな！！！！！！）

「おまえもだいぶ安定したな」
術がほぼ習得できてきた。

「…へ？」

師匠？

今日も飯作りに余念のない野営の日々のなか、師匠が呟いた言葉に疑問符を返した。

だって、あの師匠が俺を褒めるってあり得なかったし。

火の属性を持つ火竜が、竜族のなかである意味特化していることを知っている。

たとえば、巡礼。

能力を強化し、鍛える旅。対となりて、連携と協調を習慣とする日々。

たとえば、術。

炎舞と称される能力の定義。
な細かな定義はない。

他の4属の竜にはそのような

たとえば、恐れ。

旅の途中、肩が触れることにさえ怯えるものがいた。

ねえ、師匠。俺らは生きてる間、ずっとこんな思い

をしていくのかな。

「ひと、宿るもの放れたり」

「ひと、やどるものはなれたり」

「ふた、満ちるもの集い足りて」

「ふた、みちるものつどいたりて」

「みつ、生れしもの踊りゆく」

「みつ、うまれしものおどりゆく」

「よ、崇めしもの 無の終焉」

「よ、あがめしもの、むのしゅうえん」

レイラインのスポットである聖域で、師匠が告げる聖句を真似する。

曰く、これをする事で能力の暴走をおさえやすくなるとかなんとか。

……まあ、いいんですけど。

正直、怪しい行動すぎてあんまり人前ではしたくないサラエだった。

「……このへんのはぐれは、大分すくないようだな」

「……そうですね」

ぱんぱんと膝をはたきながら、聖域を出た瞬間に襲ってきた盗賊もどきを素手で片づけた師匠は呟いた。

はぐれというのは、いわゆる群れから「はぐれ」たモノたちだ。身内を大切にする群れの中で、はぐれとなるものは某かの犯罪を犯して群れを追放された者たちが多い。

もちろん、種族の特徴として成人した雄を群れから追い出すという儀礼を守る種族もいるとのことだが。

だが、そんな場合の「はぐれ」は大抵はすぐに新しく群れをつくる。…己をボスとする新しい群れを。

そう、だからこそ。

群れも作れぬようなはぐれこそが、厄介だ。

奴らは罪を犯す。

奴らは規律を無視する。

恐怖も敬虔もすべて失って、先祖から受け継いできたその誇りさえも灰にした存在。

聖域にはエネルギーが流れている。

住みよい環境。住みよい路。住みよい

獲物。

全てがある場所に、はぐれはやってくる。

巡礼者である火竜たちには、そのはぐれたちを倒し、捕縛し、各自の族へと報告を送る仕事が付随している。

面倒な話だが、それを行うことで自分たちの巡礼ルートの安全を

図れるということもあるのでやらざるをえないのだ。……ねえ、師匠。俺なんかすごい貧乏くじひいてる気がするんだけど。

【火の竜は常に貧乏くじひいてんだよ。お前いまさらそんなこと知ったのか】

真顔でそういつてのけたのはいま容赦なく襲ってきたはぐれどもをたたきのめして、踏みつけている俺の師匠です。俺の師匠です。

……師匠、その踏みつける場所は。

そのふみふみしてる場所は！！！！

俺も見てるだけで：小さくなりそうな場所です。ふみ
ふみいてええええええええええええええええ！

つい沈黙して身体の前を隠したくなったサラエだった。

連中の男としての将来に冥福を祈ろう。

女って容赦ねえよな。

「……はやく、縛ってしまえ」

「は、はいっ！」

荷物に常備してあるロープを取り出そうとした。

たぶん俺はアホだったんだ。

自分の背後で呻いていた相手が武器をとりだしたことに気付けなかった。

その武器が師匠に向かって投げられたことにも。

師匠が痛みに叫ぶまで。

「…っ！」

「師匠！？」

振り向いたときには血が舞っていた。

師匠の腹に刺さった刃は急所へと刺さっていた。

緋。

緋の色。

喪われる命の色。

「……………ど阿呆がつ！」

「ぐ……………」

そう叫んだ師匠が相手をもう一度足払いで蹴り倒した。

最後の気力の抵抗だったらしいそいつは、気を失ったらしい。

……………曖昧なのは、俺がそのときのことを覚えてはいないからだ。

「師匠！」

気づけば、能力は暴走した。

あらゆる火が踊り出す。

樹に、葉に、土に、水にさえも火は灯り、荒ぶる。

脳裏の奥で聖句によって整えられていた筈の世界への認識が、壊れて、牙解し、狂乱した。

「

！！」

叫ぶ声は、何の声に満ちたのか。

師を刺した男も、

俺に聖句を伝えようとする師も、

世界が遠かった。

「この、バカ弟子がつー！」

本来なら、女の玉肌に傷をつけてくれたど阿呆に怒鳴りつけたいところだが。

今はそれどころではなく、蹴りで気絶した阿呆は放置することにした。

「このバカっ。 『ひと、宿るもの放れたり。ふた、満ちるもの……』……くそっ、今さらきくか！……」

燃える火に囲まれながら、痛みと闘って呟いた聖句という名の鎮静呪文にまで文句をつけた。

本態である竜体であればこれくらいの武器でやすやすと怪我などはしないのだが、…巡礼の旅の性質上、地面をゆっくりと巡るために人形をとっていたのが災いした。

怪我は意外にも深いものだった。

目の前のまだ火竜の運命を知らぬ弟子という名の被保護者に眼をやる。

『　　ちよつと、能力がアンバランスでしてね』

思いだしたのは数年前。

喰えない次代の竜族の長がサイヴルに投げ渡してきた小さな同朋。
『火竜はもとより感情に左右されがちですが、彼はあまりにムラが激しすぎまして』

自分のことを嫌うあまりに、火の能力さえもともに具現出来なかった程度にはそのときの感情に左右されてしまうのですよ。

自己卑下の強い少年は、己の母親に養育放棄を受けていた。

そのせいもあってか、火の竜であれば感覚だけで出来るはずの実焰や炎燥ができなかった。

『　　俺。……やっぱり普通に生まれたかったなあ』

いつだったかぼつりと呟いた少年の姿を思い出す。

レイラインの交点となる聖域に集う水竜や木竜、土竜の家族を眺めながら呟く姿は寂しそうだつた。

『　　こらこら。何をいうか、まるで火竜がふつつじゃないかのような発言をするんじゃない』

『……師匠、普通のつもりだったの？』

わあ、自分を知らないってこわいね。

拳骨と一緒にこちらをむかせれば、暴言を呟くような生意気な少年ではあつたが。

それでも、独りぼっちじゃないと感じたのか、その表情は笑顔だった。

波動を感知したのか、先ほど訪問した聖域の担当竜《番人》である水竜が訪れた。

非常事態を認識し、遠方からの消火を行おうとしてくれているようだ。

だが、この困ったぼうやの暴走にはそれだけでは間に合うまい。

「ふ。……覚えてやがれ、クロム・ balan……」

本来、巡礼者となる火竜はある程度の能力を制御出来る年齢のものたちが対象だ。

成長期の、しかもぶっちゃけまだまだ婚活も不要の若年者になるものではなかったのだ。

なにしろ『夫婦や恋人（あるいはその候補者）が対となる』巡礼者のセオリーを無視しまくってるのだから。

サイヴルには、これだけ年の離れたガキを相手に恋などする予定は一切ない。

【あははは、大丈夫ですよ。サイヴルはどれだけ対を変えようとも伴侶なんてどうともなりますって】

笑顔でそう述べた黒黒多重人格を思い出した。

【他の火竜どもを存分に脅して踏みにじって泣かして結婚させて伴侶という名の下僕にしてやってください。だーいじょうぶです！

僕は見ないふりしといてあげますよ？】

いい顔で笑ったあの男に将来伴侶になろうという勇氣ある女性が（もし）現れたなら、是非心から思いなおせと忠告してやろうとサイヴルは思っている。

【婚活上等。 なんなら、サラエよりもっと若くて有望なのをご用意してあげますよ？】

能天気の花やら星やらを頭のまわりにうかべてのブラックトークだった。

奴の竜体の色が真っ白だなんぞ冗談だろう。

どこかで毎日奴の腹黒さを漂泊する係がいるに違いない。

サイヴルは9割本気でそう思っている。

唄いて。

響け、この鳴く声。

【……っ】

【来てくれましたか】

しばらくして、遠近さまざまな場所から聞こえてきたのは、同朋たちの声。

【

】

【

】

【

】

空を覆うかのような竜形種、龍形種、の群れ。

属性など関与することなく、非常信号を受け取ってくれた仲間たち。
鳴声

サラエの放った火と熱は、風竜の風に散らされ、水竜の水に溶かされ、土竜の土の壁に奪われて、木竜の癒しの波動によって鎮静されていた。

「バカ弟子。……これでも、おまえは火竜が《捨てられた竜》のようだというのか」

竜族は、いかなるときも同朋を護っているのに。《愛して》くれて

古来より伝わる秘泉の水には劣るものの、聖域にて汲みとられた

大地のエネルギーに満ちた泉で傷を洗い、治療を施されながら師匠であつたサイヴルは呟いた。

お母さん。

お母さん、怒らないで。

笑つてよ、お母さん。

そうしたら僕も笑える。

お母さんは綺麗だから、綺麗だからお願い笑つて。

お願い憎まないで。

お願い怖がらないで。

卵のなかで、あなたの声を聞いた。

愛しているよと微笑んでいたあなたの声を聞いたから。

だから笑つてお母さん。

もう一度、愛していると微笑んで。

きっと僕はそのために生まれてきたから。

その笑みに焦がれて生まれて

きたのだから。

《棄てないで》

目覚めたとき、世界は美しく見えた。
何が変わったわけでもない、この世界は。

愛おしく思えた。

「バカ弟子。 お礼言っとけよ」

大きな怪我を負っていた筈の師匠は平然と酒を呑み。

いつのまにやら戻ってきていた聖域には、酔い潰れた竜族たちが転がっていた。

「…………師匠、全部酔いつぶしたんですか？」

酒豪の彼女にそう訊いたら。

「まさか」

その返答に、よかったと思う間もなく。

「3分の2だけだ」

平然と答えた病み上がりの師匠には、そろそろ断酒をすすめたいと思う。

世界が美しく見えるのは、俺が世界を愛おしいと思ったからだろ
う。

火は死を与える。

火は孤独を与える。

けれども、火は営みを許す。

「…………無事でよかったです」

「おまえもな」

ためらうことなく俺の無事を喜んでくれる、母のような姉のよう
なこの女性は。

いつまでも俺の師でいてくれるだろう。

それはきっと、火の竜としてではなく。

「あったかいですね」

「そうか？ … 子供の体温の方があったかいとおもぅがなあ」

おそろおそろ抱きしめた俺に、そう返した師匠は。

きっと、俺の熱量。

生きる糧。

了
by 御紋

女性に夢見る少年サラエくん。

師匠は美しき火の竜女サイヴル。

そして、冒頭のクロム・ balan は若かりし頃の balan さま。(嫡子時代)

まあ、適当にそんな少年期だったらしい。

彼が『美女を見たら口説くのが礼儀』という青年になったのは、
なんでだろうね？

とうとう、このシリーズにカナさんが出なか

った。(泣)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1463p/>

竜の世界で君が好き！

2011年3月29日16時14分発行